九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

二人の宝玉

目加田，誠

https://doi.org/10.15017/2332860

出版情報：文學研究. 57, pp.91-96, 1958-03-20. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

二人の宝玉

目加田誠

紅楼夢を読んで以前から気になる問題がある。それは主人公賈宝玉のほかに、その容貌も性格も寸分違わぬ甄(しん)宝玉というものが居ることで、作者がなぜにこんなものをわざわざ設けたのか、いろいろ考えて見ても、よくわからない。最も従来の読者は之をあまり問題にせぬと見えて、これについて深く論じたものを殆んど見ない。ただ流石に兪平伯はこれに触れているが極く簡単である。

「甄宝玉はもとより宝玉の影である。決して実有の人物ではない。ただなぜこんな有るような無いような人物を設ける必要があつたのだろう。これは我々に解らぬばかりでなく、従前の人も亦不可解としている。高鶚（続篇の作者）も恐らくこういう設定の仕方は余りに筋がとおらぬと思つたのだろう。そこで極力甄宝玉を世俗中の一人物として、主人公賈宝玉と対照させた。が彼がそのように変えて見たに係らず、依然として全く筋のとおらぬことは相変らずである。（紅楼夢研究三八頁）

賈宝玉が影なのか、甄宝玉が影なのか、所謂甄宝玉はこの小説に無ければ無くて、筋の上に少しも困らぬ筈のものである。以下この問題を少し考えて見るに当り、先づ紅楼夢の中の、甄宝玉が出てくるところを訳出して見よう。

第二回の、冷子興と賈雨村との対話。冷子興が賈府の噂さをして、その邸に生れた賈宝玉の一風変つた性格を物語つて曰う。

「（この若様の）初めてのお誕生日に、父君の賈政様が、この方が将来何に向くかを試そうとして、あらゆる物をやたらに並べて、そのお子様につかませて御覧になると、まあどうしたものか、ほかの物は一切取らず、ただお白粉や簪ばかりをつかまれたので、政様は大そう怒られ、此奴は将来道楽者になり居るだろうといつて、非常に御気嫌が悪かつたそうです。……いまではもう七つか八つ位におなりですが、その悪戯のはげしいこと、けれどまたその悧巧なことはとても叶うものがなく、そのいつもの言い草に、「女の子は水で作つた身体、男は泥で出来た身体だから、私は女の子を見ると気持ちがさつぱりするが、男を見ると汚くて臭くて、胸がムカムカする」というのです。なんとおかしいではありませんか。将来色魔になること疑いなしでしよう」

すると賈雨村は、自分もこれと同じように変つた子供を知つていると言つて、金陵城内の欽差金陵省体仁院総裁の甄家のことを

語り出し、甄家と賈府とはずつと昔からの親戚関係で、且つきわめて親しい間柄であるが、

「去年私が南京に居た頃、或人から甄家の家庭教師に世話してもらつたが、その家の子供がおかしいことに、「私は女の子たちと一緒に本を読むと、よく字を覚え、胸もはつきりするが、そうでないとどうもぼんやりする」と言つたり、又いつも召使いの小者に向つて「女の子という言葉は至つて貴く、至つて清らかなもので、あの阿弥陀とか、元始天尊とかいう尊号よりもつと貴く、絶対なものだから、お前らのような汚い臭い口で、女の子という言葉を汚してはならん。よく気をつけるがいい。どうでも言わねばならん時は、きつと清水で口を漱いでから言うがいい。でないとひどい目にあわせてやる」などと、いかにも無茶で乱暴だが、一度塾から帰つて来て、お嬢さん達に会うと、そのやさしくて、おだやかで、よく気がついて、品のいいことは、まるで違つた人物になる。だからその父君から幾度か折檻されたけれども、どうしても改めることが出来ない。いつも打たれて痛さに堪えなくなると、「姉さん」とか「妹よ」とかやたらに叫ぶのだ。それを聞いて女の子たちが彼をからかつて、なぜ打たれてせつぱつまると姉妹たちをお呼びになるの。姉妹たちに言いわけをして貰おうとなさるのかしら、まあ恥しくはありません？」というと、彼の答が面白い。「痛くて堪まらぬ時、まあちよつと、姉さん、妹と呼んでみたら、ひよつと、痛みがなくなりはしまいかと思つて、一度やつて見たら、ほんとに痛くなくなつたようだから、とうとう此の秘法をさとつたのだ。だから痛くてたまらぬ時は、しきりに姉さん、妹と呼ぶのさ」と。

こうして賈家の息子と甄家の息子とは、どちらも同じ名の宝玉で、性格も同じであり、境遇も同じ大家の子息で、而も同じく祖母の溺愛の中に育てられている。全く同じ人間が二人居つて、一人は甄（しん）（真）、一人は賈（か）（仮）ということになる。

このところ甲戌（乾隆十九年）脂硯斎の評によればこの金陵省体仁院総裁などという官職は事実無いもので、全く架空のものだと言つている。同時に甲戌眉批には、甄家について「又一個真正の家。特に仮家と遙かに対す。故に仮を写せば則ち真を知る」とあるのは注意す可きであろう。已に第一回甄士隠の名の出るところで、甄士隠は真事隠だ（甲辰本、有正同）といい、又甄は真、後の甄宝玉も亦この音を借る（甲戌本）とか、真仮の意、宝玉も亦此音を借る（甲辰）とか注して居り、同じく第一回に賈雨村（名は化）の出るところに賈化とは仮託（甲戌本、甲辰同）と注して居るによつても明らかなごとく、甄は真、賈は仮、甄宝玉は真宝玉、賈宝玉は仮宝玉と見てよい。

又同じく第二回の甄宝玉が女児と一緒に本をよめばよく字がよめる、云々のところに甲戌本は注して、「ここで極力甄宝玉を描いて、遙かに賈家の宝玉に照らし合せている。凡そ賈宝玉を描く文章は、正しく真宝玉の為めに影を伝えるもの」だといつているのは又注意すべきである。

次に第十六回では趙婆に江南の甄家の豪奢さを噂させて曰う、

「今江南においでの甄家は、それはそれはもう大した羽振りで、あのお邸だけで四度も陛下の行幸をお迎えになりました」

云々。

又、賈妃（元春）の里帰りを迎える準備のため、賈府から江南に人を派遣するのに、「京師から銀子を持つてゆかずとも、江南の甄家には賈府の五万両が預けてあるから」云々とも言つている。

ここの庚辰（乾隆二五）四評に曰く、「甄家は正にこれ大関鍵、大節目、泛々口頭語と見做す勿れ」と。この江南甄家に四度も行幸を迎えたということは、いう迄もなく、作者曹雪芹の家が昔、康熙帝の南巡を四度も迎えたこと（胡適考証）を表している。江南の甄家というのは作者曹氏の家を意味することは明らかである。

次に第五十六回になると、江南甄家の家族が前日都に到着し、今日朝賀のために参内するので、先づこの昔からのつき合いで古い親戚の賈家に、人をつかわして礼物を届けてくる。そして甄家にも十三才になる宝玉という子供がいて、美しく又いたずらで、祖母に甘え、女の子ばかり召使つているという話をする。賈家の隠居が聞いて、孫の賈宝玉を呼び出すと、甄家の女たちは、彼があまり甄宝玉に似ているので驚いてしまう。賈宝玉はこれを聞いても半信半疑で、心中悶々として寝ていると、夢に自分の住む大観園によく似た庭に入る。するとそこへ女の子たちが現れて、よく見るとうちの宝玉様では無い、といつて彼を追い出そうとする。やがて一つの部屋に入ると、寝台の上に少年がねている。その側に女の子たちが針仕事をしている。寝台の少年は溜息をついている。従妹の病気を心配しているのである。（賈宝玉が林黛玉の病気を憂うる心の影）。

そして少年のいうことには「お祖母様から、長安の都にも宝玉という人が居て、私とそつくり同じ性質だと聞かされて、どうしても信じてくれなかつたが、夢の中で都に行つて、ある庭の中で女の子たちに追い立てられ、やつとその人の部屋にはいつて見たら、あの人は睡つていた、そこにただもぬけのからがあるばかりで、その魂はどこに行つたかわからないのだ」と。賈宝玉はそれを聞いて声をかけ、互に手を握り合つたところで、襲人にゆり起されて目がさめる。気がつくと彼は大きな鏡の前の寝台に、自分の影を見ながら睡つていたのである。

ここの描写は可なり手がこんでいる。はたして、甄宝玉が賈宝玉の影か、賈宝玉が甄宝玉の影か。第五十七回に入つて、賈宝玉は母の王夫人に連れられて、上京中の甄夫人を訪れる。先方の住居は賈府と大差無く、或は稍まさつているかも知れない。そこでよくきいて、ほんとに江南の甄家に自分と同名の宝玉という子がある事を知り、賈宝玉は始めてその事を信じた。

王夫人はまた甄夫人とその娘を招待し、その後二日して甄夫人は江南に帰つた。

第七十四回になると、意外にも甄家が官から捜索を受けたという噂さをきく。

第七十五回に、甄家から人が来て、私かに品物を運んでくる。何か秘密があるらしい。尤氏がそれをきいて、「昨日旦那様が官報を御覧になつたら、甄家が何か罪を犯して家産を没収され、審問のために上京を命ぜられたとあつた」ということを物語る。賈母は甄家の事件をきいて暗い顔をする。この回あたりまでくると、賈府も次第に凋落の兆を見せ始め、「夜、宴を開いて、異兆悲音を発す」ることになる。

そうしてその後間もない八十回を以て原作は杜絶えてしまつ

ている。

作者曹雪芹は南京に生れたが、雍正六年、周汝昌の新証によれば、作者五才の時、家屋を没収され、曹家はその後京師に返る。江南にはなお族人を置いて留守させていたらしい。

さてこう並べて見てくると、甄宝玉が真宝玉であり、賈宝玉が仮宝玉であるのはいう迄もない。ただし、周汝昌が、宝玉という名は恐らく曹雪芹の真実の名であろうか。脂硯斎評中に屢々作者を玉兄とよんでいる。その乳名から、冒頭の頑石の神話を作り出し、通霊富貴ならば宝玉、潦倒貧窮すれば頑石の一塊にすぎぬと、作者は自ら、歎息慚愧して、全書に名づけて「石頭記」といつたものであろうか、と言つているのは果して如何。しかしともかく甄宝玉を真の作者、賈宝玉をその仮託の姿と見るのは真仮の文字から一応考えられよう。そこでそれではなぜこうした自伝的な小説――これが作者の自伝的な要素の多い小説であることは、胡適以来やや強調されすぎた位である――に、自分をモデルとしたといわれるその主人公のほかに、又一人のそれと同じものを設け、その方を真と称したのであろうか。

宝玉は作者自身であり、甄宝玉が真の作者であるとするなら、賈（仮）宝玉はその仮託の姿である。作者は現実の自分のほかに、フイクションによる自らの姿を描いた。と考えれば至つて簡単である。しかし果して、そのように簡単に割り切れるだろうか。

現に南京の甄宝玉は、その境遇に於て必ずしも作者の現実そのままの姿ではない。都の賈宝玉の行動は幻設ばかりではなく、むしろ（脂評などによつて見ても）全く現実の体験と見られることが多いのではないか。

作者は賈宝玉に於て、いづれ或る程度のフイクションを用いて一つの世界を描き出した。それは彼の詩であり、彼の仮であると同時に、彼の心の真実の姿であり、彼の見きわめたこの世の真実の相でもあつた。それは仮にして実は真なるものである。作者は追憶や空想をまじえて、彼の心に描く美の世界のうら表にわけ入つた。賈宝玉は、して見れば作者の仮の姿でもあり、真の姿でもあつた。賈宝玉は夢の中で甄宝玉に出あうが（五十六回）、そのときは果して賈宝玉が仮であるか、甄宝玉が真であるか、実は自ら真とも仮ともわからぬのであつた。太虚幻境の石牌坊の（第一回）

「仮を真と作す時、真も亦仮
　無を有と為す処、有もまた無」

という対聯の文字こそ、この間の機微をとらえたものであるだろう。

それと共にまた、作者は身辺に起つたことを、たとえその儘では無くても、物語の中にとり入れたことが多かつたと思われるし、その身辺に関係ある人々が当時尚多く居た筈で、現に脂硯斎本の評を下した人も、彼をよく知つていた人であるらしいことは誰しも気がつくから、そういう場合、たとい作者の体験であつても、それはどこまでも仮りの話であり、仮の宝玉の身におこることとして描こうとした点があろうと思う。だがそれは極くあり来りの解釈である。それならば強いて仮宝玉が真宝玉を夢に訪ねて、真と仮がわからなくなるあの一段は不要なものである。やはり作者は、賈宝玉を「仮にして真」の己れの姿として描き、之を仮とすればこそ、一方に真宝玉を仮りに設定したので、そう見ると、今

度は逆に（甄）宝玉が賈（仮）宝玉の影となつてくるだろう。

作者は自分の姿を、自分の分身を、たえず見ずに居られなかつた人であるらしい。その上自分の分身を見ている自分を、もう一つ離れて描こうとする作者であつた。でなければ、どうしても甄宝玉の設定が意味を為さぬ。「一技成る無く、半生を潦倒した」と、この世に無意味に生き永らえている自分を既に投げ出している作者の、悩みと寂寥からでなければこうしたことは考えなかつたのではないか。

しかしこのように考えて見ても、尚甄宝玉と賈宝玉との並存は充分には解釈され切らぬような気がする。古来この点を特に論じたものが無いとは言え、細かに読む者には、必ずこれをどう扱つてよいかわかり難いに違いないので、現に続作の高鶚の如きは、正しくこの問題を扱いかねた一人である。

紅楼夢八十一回以後の高鶚続作に於て、甄宝玉は原作の部分とは著しく変つた人間となつて現われる。賈宝玉の影ではない、まるで性格のちがう二人の人間となつてしまう。続作では、第九十三回に、罪を受けて流される甄府から、長年召使つた下僕包勇なるものを、賈府に推薦してくる話があり、（推薦の手紙の署名は甄家の主人甄応嘉）、やがて百十四回になると、その甄応嘉（甄宝玉の父）が一旦過ちにより免職され、家産を没収されたが、このたび特に世襲職を返され、上京して謁見を賜わることになつて、賈府を来訪する。そして賈宝玉を見てすつかり驚き、どうしてこんなに我家の宝玉と似ているのだろうといぶかる（年齢は賈家の宝玉より一つ下だが）。賈宝玉は之を聞いて甄宝玉にぜひ会いたいと思う。

やがて甄家の夫人が、その子の宝玉をつれて賈府を訪れる。賈政（賈宝玉の父）は甄宝玉の容貌がいかにもわが家の宝玉と瓜二つなのを見て、彼の文才を試してみると、実に応待流るるが如くなのでひどく感心し、わが家の宝玉を呼んで会わせる。

賈宝玉は甄宝玉に一目会うと、まことに前からの友人であつたように思い、甄宝玉の方でも、どこかで一応会つたことがあるように思う。賈宝玉は、かつて夢に見た情景（五十六回）を想い出し、又かねて甄宝玉の人となりを聞き知つているので、きつと自分と同じ心の人だろうと、知己を得たつもりであつた。ところが甄宝玉の方では、かねて賈宝玉の性格を知つて居り、今日始めて会つて見て果して噂さに違わぬが、結局自分と共に学ぶことは出来ても、共に道を適くことは出来ぬ、しかし既に自分と同名同貌であるからには、やはり又三生石上の旧精魂であろうか。私は今、や、多少道理を知つて来た。ではこれを一つ彼と語り合つて見ようかと思い（中略）賈宝玉に向つて曰つた。

「私は幼いとき、身の程も知らず、これでも自分では何とかなれると思つていました。ところが家運衰え、数年来は瓦礫よりも尚賤しいものになつてしまいました。まさかこの世の甘苦をなめつくしたなどとは申しませんけれども、それでも世道人情ということは、いささか領悟したつもりです。貴方は錦衣玉食、心に叶わぬものはない。きつと文章経済に於ても高く人の上に出て居られ、さればこそ伯父上も席上の珍として御鐘愛遊ばされるのでございましょう。だから私はあなたこそ（私とちがつてその宝玉という）お名前に適しいと申したのです」

賈宝玉はこの話をきいて、これはどうもまた禄盗人どものきまり

文句に近い、何と返事しようかと思つたが……やがて

「私は貴方も亦かねて流俗を譏られ、御性格の中に別にある見解を有しておいでの方と聞いて居ました。……しかるに今、私を愚物と見られたために、世渡りの話を以て応酬されようとは思いがけませんでした。」

と曰つた。甄宝玉は之をきくと、相手は自分の少年時代の性格を知つているので、今私が仮面をかぶつているかと疑つているのだろう。いつそ心を打ち明けて話して、それで或は自分と知心の友となりうるなら、それもいいことに違いないと考えて、昔女の子とばかり遊んでいた頃の自分とちがつて、今ではすつかり心を改めていることを話し、

「書を著し説を立てるのも、忠孝以外にはない筈。何か一つ、徳を立て言を立てるというような事業を成し遂げてこそ、はじめて聖明の世に生れた効あり、父親師長の養育教誨の恩にそむかぬものです。だから私は、少年時代のあのたわいない考や、癡情を段々淘汰してまいりました。今も尚師友を求めて教をうけて蒙を啓こうと思つています」

賈宝玉は之をきいて全くやり切れなくなつてしまい、相手の甄宝玉が予期に反して全然自分と氷炭相容れぬ人間なのを知り、悶々として部屋に帰り、物も言わずに呆然としている。そして宝釵に向つて、「あんな奴は禄盗人だ」と罵倒するので、宝釵からもまた手いたく忠告される。宝玉はそれですつかり頭が狂つてしまう。

しかし百十九回に至ると、再び宝釵に諫められた賈宝玉は、甄宝玉や賈蘭と一緒に科挙に応ずることになり、一同そろつて、而も賈宝玉はことに優れた成績で及第するというわけである。

ここで続作者高鶚は甄宝玉の性質をすつかり変えてしまつた。もともと賈宝玉が甄宝玉の影か、甄宝玉が賈宝玉の影か、ともかく二人は全く同じものであつたのに、今や甄宝玉の方は、その性情をすて、志を立てて、立身出世に向い、科挙の試験に応ずる心を起している。高鶚にとつては、これこそ真の甄玉のある可き姿と考えたのであろう。始め之をあざけつた賈宝玉も遂に一緒に試験をうけることになる。こうして高鶚は原作者の心持を全くよみちがえ、甄宝玉を誤り、ひいて賈宝玉を誤つた。今や甄宝玉は作者の影でもなく、賈宝玉の影でもなく、全く高鶚自らの影になつてしまつた。かくて高鶚は完全に原作者を誤り、賈宝玉をふみにじり、この小説の後段を狂わせた。けれども流石にそこに矛盾を感じたのか、主人公賈宝玉だけは試験をすませて、そのまま行方をくらましてしまう。そして塵縁を絶つて仙界に居ることにしたのだが、それは一体何のために科挙に応じたのかわからなくなつてしまう。

こうして高鶚のあやまちから、紅桜夢原作八十回と続作四十回とを一緒にして、百二十回の物語として読みつづける人はここで甄宝玉というものの設定の意味が全く理解出来なくなる。断るまでもなく、甄宝玉の問題を考えるにしても、続四十回は切りすてて見るべきである。そしてもう一度原作者の心に返つて考えると、畢竟真は真に非ず、仮は仮に非ず、まことの「真」とは、作者に言わせれば、甄宝玉でもなく、賈宝玉でもなく、或はそのどちらでもあり、どちらでもない。甄賈（真仮）を超えた世界にあると言うのであろう。